

秋入学への意見を寄稿してもらう本シリーズの最終回は、構想を提起した浜田純一東京大学学長（総長）。浜田氏は秋入学はグローバル人材の育成環境を整備する大学と社会の改革運動だという。

秋入学 こう考える ⑨



東京大学学長 浜田純一

昨年4月に発足した本学の「入学時期の在り方に関する懇談会」（座長は清水孝雄理事・副学長）は、今年の3月末に最終報告書を総長に提出し、その役割を終えた。そこ

では、秋入学構想の意義や基本的な枠組み、今後取り組む必要のある諸課題が掲げられている。

「自己目的ではない」意識の変化が生まれて「打ち出の小づちではなく、この瞬間だけをどうえたい」と何度繰り返してき

構想は、さまざまな教育改革や社会システム改革と連動してこそ意味を持つのであり、またそうし

た総合的な改革を誘導し加速する効果を現に生み出している。

誤解を恐れずに言え、慶応義塾の清家篤塾長の言葉を借りれば、いろいろな大学の間であるい

導。そして3つ目は、世

先日、私は「改めて、

教育

界と同じ平面に立ち、言い換えれば、日本という柵を取り払ったグローバルな大平原で、能力を競い合い、また協調していこうとするマインドセットを大学にも社会にも根付かせることである。

学生たちが社会で本格的に活躍する10年後、20年後、時代の様相は今とはすっかり変わっている

に違いない。現状の継続を前提とした教育ではな

く、未来を生き抜き、新しい時代づくりに貢献していく総合的な教育改革と

大学と社会 総合改革

構想共有に意味

1年前は、さほど注目されなかった、小さな一歩だ

や「タフな人材」を育成

は社会とともに「ベクトルを共有」して動きをみ

せていくことが、今の

間に状況が大きく変わ

るための、大学や社会のシステム改革と意識改革

な立場をとるにせよ、グローバル化など現代の重要な課題に対応できる教育の在り方を真剣に考え

ようという社会的機運が大きく高まった。

入学時期の変更だけで国際化が進むわけでないのは自明である。秋入学

は社会とともに「ベクトルを共有」して動きをみ

せていくことが、今の

間に状況が大きく変わ

るための、大学や社会のシステム改革と意識改革

な立場をとるにせよ、グローバル化など現代の重要な課題に対応できる教育の在り方を真剣に考え

10年先見据える

秋入学の構想について、その意義が3点ある

と考えている。1つ目は、

学事暦の変更といわゆる

秋入学の構想について、その意義が3点ある

と考えている。1つ目は、

国際人育成へ 意識変化生む

総合的な教育改革に向けて」というメッセージを大学の構成員に発した。

その中では、本学が取り組む課題として、入試改善や教養教育の高度化、教育システムの国際化等を掲げ、再確認した。多

くは、すでに取り組みが始まっており、それらの取り組みを着実に進めていくことが秋入学構想の実質化につながる。

秋入学への移行に山のような課題があることは想定済みである。それに

幅広の連携探る

目下、高度なグローバル人材の育成を志向する

と、事は動かない。

また秋入学の構想の太

と、事は動かない。

また秋入学の構想の太

と、事は動かない。

また秋入学の構想の太

と、事は動かない。

また秋入学の構想の太